

縄文土器のつくりかた

皆さんは「縄文土器」をご覧になったことがありますか？縄文土器といえば教科書にも出てきますし、私たちが一番よく知る考古資料かもしれません。またその芸術性については、芸術家の故岡本太郎氏が大変好んだことでも有名です。さて、この縄文土器はどのように作られているのでしょうか。今回は長年行われている縄文土器の研究や、体験講座などで行っている経験をもとに、縄文土器の作りかたを紹介したいと思います。

まず縄文土器の材料ですが、この辺りでは関東ローム層の下にある粘土層を使用します。現在では工事に伴う掘削などによって粘土を手に入れることは比較的容易ですが、縄文時代はがけの露頭や比較的粘土が表面近くにある場所を狙って掘ったと思われます。

次に粘土をよくこねて土器の作りやすい粘土を作ります。現在、私たちが日常的に使っている陶磁器の場合、素地に砂はほとんど見当たりませんが、縄文土器作りでは計画的に砂を3割前後入れていきます。これはわざと粘土を粗くすることによって土器の乾燥を助けたり、縮みにくくして焼くときの割れなどを予防する働きがあるためです。ただし、砂を多く加えすぎると粘土の伸びがなくなつて土器が作りにくくなりますので、加える割合は粘土をよく見て決めます。

次に粘土を土器の形に積み上げます。土器は底から作りますが、縄文時代にはくろくや回転台は発明されていないので、下に敷物や葉などを敷いて土器を回せるようにして、その上に土器の底板となる粘土板を載せ、その上に太さが一定の粘土ひもを作つて1段ずつ丁寧に積み上げていきます。積み上げながら、ひもとひもの間に空気が残らないようによく密着させ、一体化させます。このときによくつけていないと、後で土器がバラバラにはがれてしまいます。



龍善寺遺跡(中高津)出土縄文土器

粘土を積み上げて土器の形ができたならば、土器の表面をよくなでて平らにします。その上でちよつと時間をおいて土器表面の粘り気がなくなつてから、土器の模様付けを行います。土器の形と模様は、その土器が作られた年代や地域によって特徴がありますので、その特徴をよく学習して、考えながら作ると、より本物に近い土器となります。また縄文土器に付けられた模様を見ると、下書きなしで迷いなく線を引いています。そのため線や図形に勢いがあり、躍動感が感じられます。

最後に土器をよく乾燥させて焼きます。縄文土器を焼くときには登り窯は使わず、焚き火のような野焼きで焼きます。この野焼きでは、じっくりと土器を乾燥させ余熱をかけて焼かないと土器が割れてしまうため、焼くときの気象条件などにも注意が必要です。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場では、9月20日(土)から11月30日(日)までテーマ展「縄文土器をつくる」体験製作を通じて縄文の技に迫る」を開催します。芸術の秋です。ぜひ皆さんも縄文土器の爆発するような芸術性をお楽しみください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場 (☎826・7111)

